

天売島の魅力

pick up

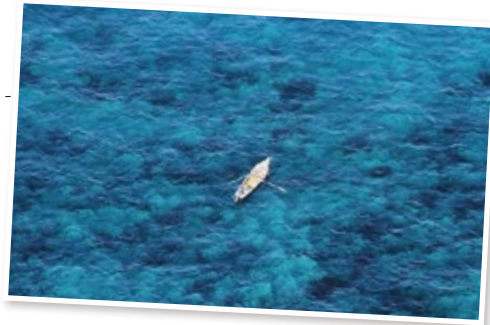
01



天売島南部の黒崎海岸で繁殖するウミネコ。茶色のヒナが見えるでしょうか？6月頃に行われるウトウウォッチングでは、子育てのためにたくさんの魚をくわえて飛び回るウミネコやウトウを見ることができます。無数の海鳥が空を行き交う光景はとても壮大です。

02

美しく、透明感のある天売ブルーに浮かぶのはウニ漁の小舟。6月～9月の天売島ではウニ漁が行われています。良質な昆布を餌にしたウニの味はまさに抜群でした。天売島ではその他にも、タラヤタコの漁が盛んです。



03



3月に天売島を離れる小中学校、高校の先生や生徒たちを見送る光景です。私たちが天売島を訪れた際も、島民の皆さんにこのように見送っていただきました。

本書は(公財)日本離島センターの離島人材育成基金助成事業による助成を受けて刊行されたものです。

[編集] 牧野睦・市川雄二郎・福田愛子(北海学園大学経済学部生)

[発行] 2019年2月/天売島おらが島活性化会議

[協力] 北海学園大学経済学部地域インターンシップ、北海道エンブリッジ [印刷] プロコム北海道

[お問い合わせ] 天売島おらが島活性化会議

〒078-3955 北海道苫前郡羽幌町大字天売字弁天40-1 tel.01648-3-5515

学生がみた

移り変わる 天売島



観音岬



天売フェリーターミナル

目次

- 02 - 書籍の刊行目的／発行人あいさつ／執筆者紹介
- 03 - 天売島とは／天売島の歴史
- 05 - 島民インタビュー
- 15 - 学生座談会
- 18 - 編集後記



書籍の刊行目的

海、魚、鳥、植物——。

天売島やこの場所で暮らす人には多くの魅力が詰まっています。

私たちは天売島との関りを重ねていく中でこのことを肌で感じてきました。

これまでの生活や文化、歴史を後世に残る資料として発信することが、

天売島の「価値」を再認識し、継承してゆくきっかけとなるのではないのでしょうか。

その想いを原点に、聞き取り調査を重ね、冊子としてまとめました。

発行人あいさつ



一般社団法人天売島おらが島活性化会議 専務理事

坂本 学

学生たちが二年間聞き取り調査を重ね、このような冊子にまとめるに至りました。天売島の魅力発信の一つとして、この冊子を多くの方に手に取っていただき、そして実際に島に来ていただくきっかけとなればと願っております。

執筆者紹介

北海学園大学経済学部生で天売島を訪問し、3名で地元の方にインタビューを行いました。



リーダー 3年生

牧野 睦



2年生

市川 雄二郎



2年生

福田 愛子

天売島

teuri-tou

北海道の北西、日本海に浮かぶ天売島は留萌管内羽幌町に属し、羽幌から西に27kmほどの沖合にある。

島の名前はアイヌ語が語源で、「テウレ(魚のせわた)」「チュウレ(足)」「シリ(島)」から、右足のような島の形を表していると考えられる。

漁業を主な産業としており、5~9月の観光シーズンに名物のウニをはじめとする

豊かな海の幸や雄大な自然を目当てに多くの観光客が訪れる。

世界最大のウトウ繁殖地、国内最後のウミガラス(オロロン鳥)

繁殖地であり、国定公園に指定されている。



面積	5.50km ²
周囲	約12km
人口	約300人

[天売島の歴史]

豊かな海産物や山の恩恵を受けて、江戸時代末期に倭人が暮らし始めたといわれる。天売島は昭和29年、焼尻島とともに羽幌町と合併。高度経済成長期には、漁業において旺盛な水揚げを誇っており、人口が最も多かったのもこの時であった。しかし、1958年以降のニシン不漁を背景に、人口も減少。現在では300人程度が暮らしている。今も変わらず漁業が中心産業であるが長期低落傾向にある。



島民の方々に インタビュー

天売島に住む人の、これまで生きてきた時間の中で、文化や生活がどのように変化したのか。漁業、祭り、鳥、教育と関わる方に焦点をあて、お話を伺いました。

天売島の漁業について vol.1

佐藤満夫 × 牧野睦

漁師 /
北るもい漁業協同組合
天売支所 教離所長

経済学部
3年



△天売港



牧野: 漁師はいつから始められたんですか?

佐藤: 親が漁師だったから中学生の頃から手伝いで船には乗っていたんだよね。漁師になったのは高校1年生だった16歳の頃だったかな。もう50年も漁師を続けているね。

牧野: 高校に通いながら漁師をされていたんですか?

佐藤: もともと高校は羽幌町の高校に通っていたんだけど、漁師になるために天売高校に転入したのさ。

牧野: 高校に通いながら漁に出るのは大変だったんじゃないですか?

佐藤: 大変といえば大変だったけども、周りの多くが同じような状態だったからね。

牧野: 今も天売高校はありますが、同じような規模だったんですか?

佐藤: 昔は人口も多かったから、生徒数も多かったよ。定時制4年の学校だったんだけど、各学年20人くらいはいたな。

牧野: それだけの人数がいながら、大半の生徒が漁師である状況ってすごいですね。

牧野: 昭和30年ごろはニシンが獲れたと聞きました。

佐藤: 俺が5、6歳の頃にはもう獲れなくなったね。今はもうタラ、タコ、ウニの3つがメインだな。

牧野: いつ頃が収穫の時期なんですか?

佐藤: タコとウニは4月から9月あたりだな。それでタラが11月から3月。

牧野: ウニ漁をしている所の写真を見たことがあります。小さい船に乗って棒を突いて獲っているイメージです。

佐藤: 船自体は5~6人くらいが乗れる大きさだけど、実際に乗るのは一人だな。漁の時間が3時間と決まっているんだ。

牧野: それはウニの漁の維持という背景があるのでしょうか?

佐藤: そうなんだ、ウニがいなくなっちゃ困るからな。限られた時間の中でいかに多く収穫するか、腕が試される場面だよ。

牧野: なんか、すごかったいいですね!



△獲れたてのウニを観察



天売島の漁業について vol.2

奈良清志 × 牧野睦
漁師 / 北るもい漁業協同組合 理事
経済学部 3年

△引き上げた網から魚を取る作業

牧野:お時間いただきありがとうございます、もしかしてお仕事の途中でしたか？

奈良:作業場で網作っていただけだから大丈夫だよ。

牧野:網ってご自身で作られるんですか？

奈良:そうだね、やっぱり刺し網漁では重要な道具だからね。新しいものと1年経ったものを比べると、獲れる量が全然違うのさ。

牧野:設備がすごく重要なんですね。

奈良:やっぱりそうだね。天売島は昔から漁業が盛んだけど、昔は今に比べて設備も十分でなかったから、獲れる量が少なかったりしてね。

牧野:人力の作業も多かったんじゃないですか？

奈良:今は網引きなんかはそうだね。それまでは奥さんに手伝ってもらったり、その分の人を雇ったりしていたよ。

牧野:たしか、漁のポイントもコンピューターで管理されていたよね？

奈良:10年分のポイントは全てそうだね。それより前のものは紙に手書きで記録をしてあって、もう要らないんだけど、もったいなくて捨てられていないな。

牧野:漁のポイントってかなり当たるものなんですか？

奈良:当たる当たる！多少の変化はそりゃあもちろんあるけども、そこは長年の経験だな、努力してるもの。

牧野:天売漁業において、昔と今のどういった点に変化があると思いますか？

奈良:そうだな、昔は個人の利益重視な部分があったんだよね。でも20年くらい前からは、独り占めではなくて、みんなで輪を作って漁をするってのがあるかな。だから今は、それぞれの漁師が平等にいいポイントで仕事ができるように、漁をする場所を決めて順繰りする仕組みがあるよ。

牧野:漁師の方同士の雰囲気づくりにも繋がりがそうですね。

奈良:そうだね、今は島の漁師が減っているんだ。高齢化が背景にあって、辞める人は多いけど若い人は入ってこない。そのためにも新しい組合の新しいきまりや施設を作っていて、こういった働きかけが必要だと考えているんだ。

牧野:若い人が入ってくるメリットはどういったところにあると考えていますか？

奈良:若い人の力は大きいと思うよ。何事においてもフットワークが軽いし、切り替えも早い。そういった部分は漁師に必要な要素だと思うし、漁業にも勢いがつくんじゃないかな。



天売島の漁業について vol.3

坂本武房 × 牧野睦
北るもい漁業協同組合 天売支所 所長
経済学部 3年

△天売港

牧野:坂本さんは天売生まれだと伺いました。

坂本:そうですね、父親が漁師だったから、高校生の時は高校に通いながら漁にも出ていたな。

牧野:もともと漁師をされていたんですか？

坂本:そうなんだよね、でもだんだん漁師よりも漁協に興味を持ってきて漁協専門学校に1年間通ったんだ。

牧野:漁協の専門学校があるんですね！それは天売島にあった学校ですか？

坂本:いや、当時は江別市にあったんだよ。今は千葉県にある全国漁業協同組合学校しかないはずだね。

牧野:専門学校ではどんなことを学ぶんですか？

坂本:漁協の位置づけ、経理、漁業における信用について、とにかく漁協に関することはなんでも学ぶんだ。

牧野:漁協のお仕事というのはどんな内容なのでしょう？

坂本:本当に漁業に関わる全ての事を仕事でやっているよ。一番大きいのは販売に関わる場所かな。

牧野:漁師さんが収獲した魚の販売ですね。

坂本:そうだね、漁師さんが獲った魚は一括して漁協が集荷をする。それから仕分けをして、道南や道東へ出荷しているんだ。

牧野:魚の輸送は全部船ですよね？

坂本:そうだね、天売島は海に囲まれているから、フェリーで運ぶしかないんだよ。

牧野:海が荒れている時は運べない、なんて状況もあるのでしょうか。

坂本:そうだね。この環境下だから仕方のないことではあるんだけどね。でも2017年に大型の冷蔵庫を設置して、いくらか問題が解消されたんだよ。

牧野:今後の天売島の漁業に関して思うことがあれば伺いたいです。

坂本:やっぱり後継者の問題だよな、1960年頃は200人〜250人は漁師がいたんだけど、今は55人にまで減ってしまった。

牧野:要因としては継ぐ人がいなくなってしまったが挙げられるのでしょうか。

坂本:そうだね。だから最近では天売島外から漁師になりたいという人を募集しているんだ。期間は3年と5年の2つの枠を設けていて、実際には3人の人を雇っているよ。





漁師の奥さんからのお話

坂本・金光 × 谷口・丸山・牧野

△ウニの殻剥き作業

谷口:わ——い! 女子会です!
丸山:インタビューではありますけど、ちょっとお話しする、くらの感じで堅苦しくなく話していただきたいと思います。
金光:こうやってお話しができるの嬉しい!
牧野:皆さんはずっと天売に住んでいるんですか?
坂本:私は天売で生まれて、天売で育ったよ。
金光:私は空知郡奈井江町出身なんですけど、天売島にはたまたま友達との旅行で来たのがきっかけだね。
谷口:すごいきっかけですね。旅行をきっかけに天売に住むようになるなんて、人生何が起きるかわからない。
丸山:坂本さんをご結婚はいつ頃されたんですか?
坂本:18歳の時に漁師の旦那さんとね。四人の子供にも恵まれたよ。
谷口:民宿を開かれていたと聞きました。
坂本:昭和40年くらいから始めたのよね、あの頃は観光客がすごく多い時で。
金光:寝る場所とご飯が食べられればいってお願いしてくるくらいだったよね。
牧野:泊まる場所に困るくらい観光客が多かったんですね。
坂本:廊下でいいから寝かせてくれないかってお願いされたこともあったわ。

丸山:その頃の観光客の方は何を目的に島に来ていたのでしょうか?
金光:今もそうだろうけど、昔の観光目的といえばオロロン鳥の観察だったね。
坂本:昔は今よりもっと多くの鳥がいたのよ。あの頃は、島に住む人や観光客とうまく共存することが難しかったみたいだね。
谷口:坂本さんは今はもう民宿は経営されていないんですよね?
坂本:観光客も少なくなったのもあるけど、そのうち旦那さんがホタテ漁を始めてね。手伝いをするために民宿はたたむことにしたんだよね。
谷口:昔はホタテの獲れる量は多かったんですか?
坂本:すごく多かったよ。他にもマグロ、アワビ、イカ、コウナゴの漁獲量が高かったね。
丸山:漁師の奥さんってどんな生活をされるのでしょうか?
金光:毎日同じ時間に起きて、お弁当作りをするのよ。
坂本:それから、漁から島に帰ってくる旦那さんを迎えるために、深夜にお風呂に入って着物で船の到着を港で待ったりもしたね。
谷口:やっぱり今も昔も早朝の旦那さんの漁に合わせて、奥さん方も生活されているんですね。

天売島の漁業について vol.4

森脇洋三 × 牧野陸

島民歴
73年

経済学部
3年



森脇さんの経営されている自転車レンタル店△

牧野:森脇さんは島の歴史に詳しいですね。
森脇:今は「いい島」という島の歴史をまとめたチラシを作っています。羽幌とを繋ぐフェリーの中に置いてもらったりしていますね。
牧野:天売島に来る時に見ました! それもあって是非お話を伺いたいな、と思ってインタビューをお願いしたんです。
森脇:こういった角度から島に興味を持ってくれるのは嬉しいですね。
牧野:森脇さんといえば、経営されている自転車レンタル店の二階は歴史的資料が保管されているのが印象的です。
森脇:初めは単なる趣味だったんだけどね。使命感に駆られるようになったのは、歴史的産物がほかの地域では保管されているのに、天売島にないのはおかしいと気づいたのがきっかけでした。「昔から生きていたカタチ」を残していきたいと思っています。
牧野:今回は、天売島の漁業に関して教えていただきたいんです。今漁業が盛んなのは海に囲まれている、という環境からなののでしょうか。
森脇:まあ、そうだろうね。昭和30年頃の今よりもっと多くの魚が取れていた時ね、山形とか秋田、青森から漁師の人たちが来るように



なったんだ。
牧野:日本海側の地域ですね。
森脇:初めはタラが目的だったみたいなんだけど、天売島は昆布やアワビ、カレイなんかも獲れる。こうして漁師人口が増えていったんだよ。
牧野:今よりも水産業に関わる人は多かったんでしょうか。
森脇:そうだね、今も人口に対する割合は水産業多いんだけど、人口全体が減っているから水産業者も減っているよね。昔は塩ウニといった加工品にも力を入れていたんだ。
牧野:それをできなくなったのは働き手が少なくなったことが挙げられるのでしょうか。
森脇:そうだね、例えば今話に上がった塩ウニだけけど、塩ウニは塩とガーゼとウニを何重にも重ねて作る、手の込んだものなんだ。もちろん生のウニの需要が高まったこともあると思うけど、そういった問題があるのも事実だね。
牧野:これからの漁業に期待することはありますか?
森脇:そういった状況の中でも、今の天売島の漁師の方は力を込めて漁業と向き合っているんだよね。天売の水産物が昔とは違う形でもっと盛り上がってほしいと思っているよ。



天売島の祭りについて vol.1

齋藤剛 × 市川雄二郎

巖島神社祭
2018年度副代表

経済学部
2年



△巖島神社祭

市川: それでは、小型運輸の齋藤剛さんにお話を伺いたいと思います。齋藤さんは巖島神社祭の副代表をされている方です。よろしくお願ひします。

齋藤: よろしくお願ひします。

市川: 前回の渡航では、お祭りに参加させていただきありがとうございました。

齋藤: こちらこそありがとう。こういう形で若い人が入ってくれるのはうれしいよ。

市川: あのような御神輿を担ぐお祭りは初めてで、すごく新鮮でした。



齋藤: そうだね。しかも歌いながら担ぐっていうのは無くなってきているらしいし。大抵ただ担いだり、わっしょいわっしょいってリズムを取るくらいだと思うからね。天売のお祭りのあの音頭は、昔のニシン漁の掛け声だったみたいだよ。

市川: こういうところにも天売島の漁業の豊かさが現れているんですね！

市川: 観光客の方もいらっしゃいましたよね。そういう方にとっての見どころはどんなところにあると考えますか？

齋藤: 歌いながら担いでいるのもそうだけど、鳥居の前を行ったり来たりするところは見ている面白と思う。観光客の中にも結構見てくれている人がいたら法被を渡して呼んだりもするし。写真好きな人はたくさん写真を撮って後日送ってくれたりもするよ。

市川: 担ぎ手が少なくなっている分、僕らのような大学生や観光客の方なども参加しやすくなっているんですね。現地の人と交流が生まれやすいのも人口の少ない離島ならではの魅力ですね。

齋藤: 天売は人も暖かいし、誰かと仲良くなればすぐに交流が広がっていくから、一緒に楽しんでいってもらえれば嬉しいです。

市川: ありがとうございました。来年もよろしくお願ひします！

齋藤: こちらこそ、ありがとうございました！



天売島の祭りについて vol.2

竹内英則 × 市川雄二郎

天売島巖島神社
神宣

経済学部
2年

△大漁旗で祭りをさらに盛り上げます

市川: それでは巖島神社の神職をされている竹内さんにお話を伺いたいと思います。

竹内: よろしくお願ひします。

市川: そもそも、巖島神社は広島にある神社ですよ。どのような関係があるのですか？

竹内: 向こうが本家で、うちが分家ですよ。市岐島姫命という神様を祀っていて、天売島には1804年に祀られているので、お祭りもその時から行われていたわけです。

市川: 巖島神社祭はどういったお祭りなのですか？

竹内: これは例大祭といって、神様を御神輿に乗せて社から出すお祭りですよ。大漁祈願や健康安全を願ってお祈りするんです。昔は御神輿を船に乗せて島を一周したりもしていましたね。ただ、昔も今も変わらないのはお祭りのメインは御神輿を戻すときに鳥居を行き来するところなんです。

市川: それはどのような意味があるのですか？

竹内: 我々も神様の気持ちはわからないですけど、まだ自分の社に帰りたくないという神様の想いが担ぎ手を知らず知らずのうちに動かすんですよね。

市川: とところで、今と昔で祭りはどのように変わりましたか？

竹内: 関心が薄れてきていますね。それに規模

も小さくなりましたよ。

市川: 担ぎ手がいなくなると御神輿を担ぐこと自体難しくなりますね。

竹内: ですから地元以外の方も大歓迎ですよ。もっと祭りを盛り上げるには若い者が声を出してもらわないといけな。

市川: 若い人たちのもっと積極的な動きが必要ですよ。

竹内: 今は今の人なりの発想や行動があるからね。我々の儀式は変えようがないけれど、他のパフォーマンスはやりようでどうとでもなるんですよ。あとはお祭り以外でも参拝に来て欲しいですね。そうすれば神道の流れもわかっってもらえるし、子供たちに伝えることもできる。触って見ないと感触はないのです。

市川: お祭りを続けていくには伝統や儀式を知り、それを引き継ぐとともに若い発想で今に合わせた新しい形に変えていく必要があるのですね。



天売島の海鳥について

石郷岡卓哉 × 福田愛子

北海道海鳥センター
環境衛生係

経済学部
2年



△オロロン鳥

福田:天売島で海鳥が見られるようになったのはいつ頃からですか？

石郷岡:大昔から生息していたと思いますが、いつ頃から海鳥がいたかは資料が無く分かりません。ただ、礼文島のオホーツク文化期(5~9世紀頃)の遺跡から、人が海鳥を槍で突いて獲っていたと分かっているので、少なくともその頃には天売島にも海鳥がいたと思います。

福田:離島に海鳥は集まるのでしょうか？

石郷岡:海鳥繁殖地の多くは外敵の少ない離島にあります。また、崖で子育てする種類が多いんですよ。

福田:それはどういった理由からですか？

石郷岡:潜水のために体が重くて陸上行動が苦手で、陸で外敵に襲われるのを避けて崖で繁殖するんです。

福田:今でも天売島が海鳥の多い場所であるのは何故なのでしょう？

石郷岡:天売島は、人が暮らす低くて平らな土地は東側、海鳥繁殖地がある崖は西側で間に距離があります。人も寄せ付けない高さの崖もあるような地形が、海鳥と人の共生を可能にしたと思います。

福田:今では天売島が日本で最後のウミガラス繁殖地ですよ。観光客の方も多いと思いますが、昔から海鳥を観光業にしていたんですか？

石郷岡:昭和30年代に離島観光ブームがあり、

多くの観光客が海鳥を目的に訪れていたようです。あの頃は今よりも沢山のウミガラスがいたんですよ。ただ、当時は自然保護の意識が低く、ウミガラスが一斉に飛び写真を撮ろうと大きな音を立てて驚かす人もいたようです。

福田:そういった行動は海鳥の減少にも繋がりますよね。

石郷岡:そうですね。海鳥がいなくなる環境は人にも良くないと思います。魚が餌なので海の環境も大事ですし、森も川も里も海に繋がる環境全てを考える必要があるんです。

福田:多くの人に海鳥や自然環境について理解を広げていく必要がありますね。

石郷岡:今は自然に影響を与えないような観光に変化しました。自主ルールをつくってウトウを見るのを20時までにしたり、船も海岸から200m程までしか近づけないようにしたり、ここ十何年で大きく変わってきました。天売島は人と海鳥が近い距離で共に暮らす場所だと思います。人も暮らしているお陰で定期航路や宿があって海鳥の観察がしやすい場所なので、もっと多くの人に来て見て欲しいです。



学校教育について

吉田久 × 福田愛子

天売小中学校
教頭

経済学部
2年



△天売小学校・天売中学校校舎

天売高校の案内板△



△天売小学校は2012年で120周年を迎えました

福田:私は札幌の小中学校を出ているので、人数規模の小さい学校にはどんな特徴があるのでしょうか？

吉田:少なくとも天売島の小中学校では、島全体で子供を見守り、育てる風土がある。保護者はもちろん地域の方々が積極的に子供たちと関わりを持ってくれます。そういったバックアップは教育的にやりやすいと感じますね。

福田:そんな天売島という場所だからこそ、学んでほしい部分はどこなところでしょうか？

吉田:地域の方々に支えられて勉強できる、色々な人たちが関わってくれて生活できていると感じて欲しいです。自分たちで恩返し出来ないかって発想に繋げて欲しいな、と。

福田:それはどんな土地においてもそうですね。ただ天売島では子供や学校と地域住民の距離が近いように思いました。それがより感じられるような場所であるのは大きなメリットで

すよね。

吉田:そうですね、他にも少人数教育だからこそ、一人の子に多く時間をかけてつまずいたところをしっかりと教えられるのは大きいプラス面ですね。

福田:では逆に島だからこそ経験できないことはあるのでしょうか？

吉田:普段の生活で、お互いの意見を交換したり練り合ったり、集団で意見を積み上げる機会が少ないのは経験できない事かもしれないですね。

福田:でもグループワークをする機会はありますよね？

吉田:あります。小中合同でグループを組むときは、中学生がそれぞれリーダーになって小学生に気を遣いながらやっています。年の差が大きいからこそ、年長者がどう引っ張っていくのかは肝になってきますよ(笑)

福田:他の大きな学校では中々無い場面ですね。発言する力もつきそう。

吉田:小学生は中学生を見て育つので中学生になったらこうなる、と知らずに分かるんです。中学生だと黙ってられないし、初めはやらざるを得なくても段々話し合いの進め方が上手になります。悩みながらも成長してくれる姿は、頼もしく見えますね。

書籍班の活動も二年目を迎え、こうして冊子を作成し、天売島の過去の部分を発信していくこととなった。
書籍班昨年度メンバーの木村拓貴、谷口明華里、丸山実岐、今年度メンバーの牧野睦、市川雄二郎、福田愛子で学生座談会を開いた。
二年間の活動を振り返りつつ、このプロジェクトの経緯やそれに関するエピソードを伺った。



学生座談会

3年間続く地域インターンシップ活動。
学生たちの想いを聞いてみました。

そもそもこの書籍プロジェクトが始まったきっかけは何だったんでしょうか？

谷口:2017年の6月に島を盛り上げる企画を学生それぞれ提案したんです。
木村:そうそう、僕らが出した案をおらが島の坂本さんにお見せして、GOサインが出たのがこの書籍案と、もうひとつの空き店舗の活用案だった。

どうして書籍をまとめようと思ったんですか？

木村:僕は2016年から地域インターンシップを通して島に来ていました。そこで現在の状況や今の島民の方の様子は実際に見てこられたけど、天売島の歴史を知らないな、と。ただ調べようと思ったときに、過去を取り上げた資料が少ないことに気づいたんですよ。
谷口:自分たちが読んだのが羽幌町史だったんですが、それがとにかく分厚い。
丸山:10cmくらいありましたね。しかも字が小さくて。その中の天売島の部分を一生懸命探して読みました。
木村:そのことが、単純にちょっとさみしいなって感じてしまったんです。

そこで自分たちで作ってしまおうと？

谷口:はい(笑)ただ、単純に歴史をまとめるだけなら誰にでもできる、せっかく天売島との繋がりがあってもったいないなと思いました。毎年8月に1週間ほど島に滞在する機会があるので、その時に島の方にお話を

直接伺い、時間とともに天売島の文化や様子がどのように変化したのか、また、それに伴って起こったであろう、住む人たちの心境について取り上げたいと考えたんです。

それは三年間、地域インターンシップの活動をしてきた北海学園大だからこそできることですよ。実際お話を伺った時間はいかがでしたか？

丸山:すごく楽しかった!
牧野:丸山は沢山質問攻めしていたね(笑)
丸山:昨年度は漁業のみに焦点を当ててお話を伺ったんですが、突き詰めて考えていくと、漁業関係者の方の生活って知らないことが多くて、沢山質問をしてしまいました(笑)
牧野:島の人からしたら当たり前前の生活なんだろうけど、私たちからすると新鮮な話だったりしたね。
谷口:どれも共通して言えるのは、島という立地であるために、生活に海の状況がすごく密接に関わってくるということ。
丸山:海が荒れれば、船が出ないから海の方への働きかけが出来なくなるしね。
牧野:そういえば、2017年に大型冷蔵庫が設置されて、新鮮なものをより効率的に出荷できるようになったんですよ。
木村:そうなんだ! どんどん天売ブランドの水産物が増えて広がっていくと嬉しいね。



1.店舗営業をする傍ら、インタビューも行います 2.単独でのインタビュー中 3.写真資料も忘れず! 4.載せきれなかった話も沢山!これは店舗班の取材風景です 5.島の方からも校正していただきました 6.デザイン会社の方との打ち合わせ風景

今年度は漁業の他に6月にあるお祭りとお島の島についてもお話を伺ったんですよね？

福田:はい、二年目では実際に書籍として形にすることが決まったので、もっと情報量を増やしたいと思ってテーマを増やしました。
市川:単純にその二つについても、すごく興味があったしね(笑)

今年度は港近くの空き店舗で飲食営業をしながら、同時にインタビューもされていたんですよね、大変だったんじゃないですか？

牧野:飲食営業に関しては、空き店舗班のメンバーが主体になってやっていたので、あくまでも私たちはサポート役でした。それでも時間を見つけてインタビューをしていくのは大変だったような…?
市川:大変でしたよ! 本当は三人でインタビューをする予定だったのに、飲食営業の人手が足りなくて一人で話を伺いに行くことになって。
福田:すごく緊張しましたよね、牧野さんが私の肩に手を置いて、「君ならできる」って目をキラキラさせて言うんです。
市川:結果楽しく話を伺えたので良かったですけど、インタビューの最初はすごくガチガチだったと思います(笑)

今回は小冊子を作成しましたがどうでしたか？

木村:すごく本格的な冊子が出来るんだね!
牧野:そうなんです、本当に立派なものが出来てうれしいです。
福田:最初はページ数ももっと多くて、ハードカバーの本を作ろうと思っていたんです。
丸山:なんで予定を変更したの?
市川:やっぱり、島の外の人に向けて作りたいからですね。それにこの書籍の目的は、今まで堅苦しい文章でしか天売島の過去を知ることが出来なかったのを、もっと手に取りやすい形で発信する、ということ。それが出来るのは冊子形態かな、と思いました。

今後書籍班はどのような活動をしていくんでしょうか。

牧野:書籍班としての活動も、このような冊子形態で発信し、形として残すことが出来ました。ただ、この冊子を通じて天売島に関心を持っていただくには、つくることで終わらず、冊子をどう広げ、どう読んでもらうかが重要だと思っています。
福田:天売島の観光客の方が集まるような場所に設置していただけたらいいですよ。
市川:あとは島の外でどう発信していくかだね。天売島がこの冊子を通じてもっと盛り上がるようにどんどんアイデアを出していきたいね!



編集後記



△フェリーターミナルでの見送り風景

というわけで、二年間のインタビューをこのような冊子形態でまとめることが出来ました。冊子を読んでもらった方々、どうもありがとうございます。私たちは天売島の歴史資料の少なさに着目し、読みやすく手に取ってもらいやすいものを作りました。これを通して、天売島に関心のある方を少しでも増やしていきたいと思っています。

また、本冊子ではインタビューのエッセンスを会話形式でまとめました。詳しいインタビュー内容は別資料にまとめてあります。

振り返ってみると、皆さんインタビューの依頼を快く受けてくださったのが印象的です。べたな表現にはなってしまいますが、これは天売島の「温かさ」ではないでしょうか。また、このようなインタビューが出来たのも、

北海学園大学経済学部地域インターンシップの三年間の活動を通して、島の方との関係性が築けていたからではないかと感じています。そして学生側にとっては、天売島の過去と今を知ること、島にどのように働きかけることが出来るか、それを認識できる機会にもなりました。

最後にはなりますがご支援いただいた、発行元であるおらが島活性化会議様、助成いただいた日本離島センターの離島人材育成基金助成事業様、また、地域インターンシップに関わる北海学園大学経済学部、北海道エンブリッチ様、またこの冊子のデザイン・印刷をくださったプロコム北海道様に感謝申し上げます。

北海学園大学経済学部 地域インターンシップについて

私たちは「地域インターンシップ」という授業の一環で、天売島で活動をし、書籍を作成しました。

活動目的

- 1 地域が抱える課題解決に向けた取り組みを実施することで、地域社会に貢献する。
- 2 机上で得た知識を具体的な地域の課題に応用し、実践につなげる。



これまでの活動報告

- 2016年 8月20日～26日 第一回地域インターンシップ
11月18日 シンポジウム「地域インターンシップって何だ？天売島の実践から振り返る」の実施
- 2017年 3月 8日 第一回現地報告会
6月17日～18日 事前訪問にて厳島神社祭への参加
8月20日～25日 第二回地域インターンシップ
- 2018年 3月17日～19日 ミニバレーボール大会in天売島の参加予定だったが船の欠航で中止
6月17日～18日 事前訪問にて厳島神社祭へ二度目の参加
8月 7日～13日 第三回地域インターンシップ

